

原初の言葉が生まれる場所

～幼児教育における言葉の重要性～

Source of primitive language
- The importance of language in infant education -

前田 一明
Kazuaki MAEDA

青森中央短期大学幼児保育学科
Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

Key words ; 幼児教育 言葉 身ぶり

1. はじめに

筆者が保育士養成校である本学にて専任教員として勤務して数年、学生の言葉の軽さというか同じ言葉を使っても言葉の重みを感じないと思うことが多い。学生のみならず、筆者自身の言葉や日々の生活を通じた周りの人々との会話においても、同様に感じることもある。

大学生活においては特に実習指導にて学生と会話する機会が多く、講義や実習の訪問指導、普段の学園生活を通して、学生との会話の中で「レポートが書けない」「実習ノートが書けない」という言葉を良く聞くようになった。このような場合には詳しく何故書けないのか確認を行うようにしているが、多くの学生から普段話している言葉以外の言葉で書くことに慣れていないため、それらの記入に多くの時間を費やす必要があるという意見が返ってくることが多い。つまりは書き言葉が上手く書けないということである。しかし、普段筆者が感じている言葉に対する違和感は、話し言葉に対するものであった。身の回りの話し言葉に対する違和感が、学生の書き言葉に対する苦手意識と関係するのか気になり改めて話し言葉と書き言葉の両方について考察を行おうと思ったのが、本研究ノートを執筆するに至った背景である。

2. 言葉とのかかわり方の変化

学生が書き言葉を綴る機会は、それこそ大学のレポートや実習ノートを書くときくらいしかない、というのが先に述べたような学生の嘆きの要因であると思われる。しかも、その数少ない機会さえ、話し言葉で書いている学生も少なくない。

私たちの大半は、少し前までであれば手紙や電子メールを使用していたところを、現在はチャットで連絡を取り合うようになった。年賀状でさえチャットで出すようになりつつある。チャットはあた

かもその場で相手と対面しているかのように視覚的に直線的に時間が流れ、そこでは話し言葉が使われることが多い。チャットツールを使用する職場も増え、筆者自身もこれまでの日常との変化を実感している。「今の時代はこれが普通だから慣れるしかない」と言われたらそれまでなのかもしれないが、どこか言葉の重みが欠けてしまっているような、ある種の寂しさを感じる。これまで電報や据え置き電話、ポケットベル、携帯電話、スマートフォン等々、さまざまな通信機器が開発されてきた。新しい機器が市場に出回るたび、人と言葉の関わり方は変化している。現代ではそれだけではなく、他の様々な場面で（例えば昔であれば情報収集は文字で行なっていたが、現在はYouTubeなどの動画による情報収集が主流かと思われる）書き言葉を使用する機会は確実に減ってきているだろう。このような言葉との関わり方の変化にいち早く気づいていた1人に、心理学者の岡本夏木（1926-2009）がいる。

岡本は当時、マスメディアの発達や出版物の洪水等による虚な言葉の氾濫によって、本来人間の心に寄り添い、共に在るはずの言葉が、人間の心から乖離してしまっていることを問題視していた。以下、岡本（1982,p.13）の引用である。

人間をして人間たらしめているのがことばであるなら、ことばの発達、当然子どもをより人間的たらしめることの大きい源であり、またそのあかしでなければならぬはずであるのに、ことばの発達が、人間性の喪失につながってゆく。このような現代の時代というものを、どうとらえかえしてゆかねばならぬのだろうか。

『情報通信白書 令和4年度版 ICT白書 情報通信白書刊行から50年 ICTとデジタル経済の変遷』（2022）によると、岡本が言葉と人間の心の乖離を問題視していた当時は、米英で通信の自由化が発展し、日本においても固定電話やテレビ放送が普及しはじめていた。また、集積回路技術や光ファイバ通信、宇宙通信などの技術が生まれ、画像通信やデータ通信などのメディアが注目され始めた時期でもある。携帯電話もスマートフォンも普及していないにも関わらず虚な言葉が蔓延していたということは、現代においてはさらにその傾向が強くなっていることは想像に難く無い。

3. 身ぶりと言葉

言葉の起源について、本来言語はコミュニケーションを目的としたものであり、（諸説あるが）身ぶりや鳴き声、うめき声のような発声を通して誕生したと言われている。その後、文字が生まれ、書き言葉が生まれたのはかなり後である。したがって、現代のように話し言葉が生活の中心となっているという状況は、ある意味では自然な流れであると言えるかもしれない。

次に、幼児の言語獲得に至るまでの過程に注目してみたい。幼児は言語を獲得していく初期段階において、身体動作を使うようになる。自身が欲するものに手をのばす、または親が話した言葉に反応して手を握ったり開いたりする。これらの行動はおそらく身ぶり（意図的に何かを表すための動き）ではなく、目に入ったものを触りたい、または日常を通して重なった経験（反復）による行動だと思われるが、一歳前後から幼児は行動で自身の望みを示唆するようになる。例えば抱っこをして欲しいときに泣きながら足につかまってくる、または、何か発声しながら机の上にあるものを指差し取って

もらおうとするなどの行動が見られる。幼児にとって「身ぶり」とは、自身の身体感覚や情動の結果が行動に現れ、そこに幼児なりの意味を付与したものであると言えるのではないか。したがって、身ぶりには幼児の感覚や情動が宿っている。幼児はこのような身ぶりと発声を通して、言語獲得へと至るのである。

幼児期は自我を確立すると共に、言葉を獲得していく過程でもある。言葉が自我より先、と言えるかもしれない。親や他の保育者の見よう見まねでただ真似して反復していたところから「この文脈でこの言葉を発声するとこのような意味を持つ（あるいは欲求が満たされる）」といったように状況と身動きが合致するようになり始める。そして、その言葉が意味するものを理解した上で、言葉を使用するようになる。このように、言葉の意味や文脈とその発声を一致させる過程で見られるようになるのが「身ぶり」である。身ぶりとは、相手に見られていると自覚しつつ、自分の行う動作に意味を持たせ（しかもその動作を見せる相手にも意味が伝わると理解し）、行うものである。自覚するという事は、文字通り自身を覚えることであり、したがって身ぶりは自我を認識し始める1歳前後から2歳頃に見られるようになるのである。

子どもは言葉によるコミュニケーションが可能になる以前に、表情、視線、目の動き、音声、身ぶりなど、身体などでコミュニケーションを行う（小椋たみ子、2017,p.26）。この事実を前提とすると、マイケル・コーバリス（2008,p.318）が以下に述べるような、言語の起源が「身ぶり」にあるという主張は無視できない。

文法を有する言語は二百万年前には高い確率で出現していただろう。だが、はじめは主にジェスチャーによるものだったと考えられる。ただし、ジェスチャーにうなり声や叫び声に近い音声で抑揚をつけていたに違いない。だがこの音声は意図的なコントロールがほとんどできず、情動に基づいていた。

言語体系が確立すると、あらゆる事象は言葉によって指し示される。そこでは、言葉は指示するもの（音）と指示されるもの（意味）に分かれている。これに対して、幼児の言語体系は確立されたものとは言えず、様々な意味や音のイメージが、より曖昧に結びついている状態と言えるだろう。

子どもの言葉に魅力的な味わいを感じるのは、言語を獲得する以前の身体的な部分（身ぶり）や、言葉で指示することによってこぼれ落ちてしまう部分を感じ取ることができる（曖昧な言語体系ゆえ）からかもしれない。私たちはおそらくそこに言葉の、言語の誕生を垣間見ているのだろう。このような身ぶりを伴った感覚的な言葉は、言い換えると、言葉の原初に接する言葉と言えるかもしれない。筆者個人としては、言語の起源はジェスチャーなのか、鳴き声なのかという議論については、どちらかに断定できるものではなく、もしかすると幼児の言語獲得のように、どちらともなく作用し合った結果、長い時間をかけて言語確立したのではないかと考える。

4. 現代の言葉「身ぶりなき言葉」とは

前章で述べたような言葉に対し、「はじめに」「言葉との関わりかたの変化」にて述べたような違和感を覚える言葉は、身ぶりなき言葉とすることができるのではないだろうか。言語の獲得と共に、

幼児期に見られたような身ぶりは見られなくなるものではあるが、本来話し言葉には様々な環境や感情、感覚が深く関わっており、身ぶりはそれらと言葉を結ぶ役割を果たす。会話は話し手や聞き手の表情、手やその他の身体の動き、場の雰囲気など、その場の全てが作用し合い、発語され連なり成立するものである。しかし現代においては、機器を通した文字情報としての、身ぶりを伴わないある意味無感情の言葉が生活の基盤となり、実際に対面している時でさえお互いを見ることなく、あたかも通信機器の画面を見ているときのように無表情で話す人も多い。

私たちは実際に対面しているかのようにパソコンの画面に映る相手と会話したり、相手がそこに居ないにも関わらず相手が居ると想定してチャットでの“対話”を行ったり、スマートフォンで動画を見たりする。このような行為には、実は前提として現実の体験がある。当たり前ではあるが、実際に人と会話したり、会議室で向かい合って議論することや、山に登り風景を眺めたりといったような体験を通して感じ、考え、認識した事柄があるからこそ、私たちはICT社会においても違和感なく（現実の経験で補いつつ）生活することができる。しかし、既にICT化が進んだ社会に生まれ落ちた子どもにとって（私たちが例外ではないが）、たとえば実際に山や海に向き匂いや音や感触、目に映る風景、あるいはその場所の空気の味など全感覚的に体験すべきものを、まず初めにスマートフォンの音や画面で体験する、ということが圧倒的に増えているのではないか。実際の体験よりも擬似体験、仮想空間が先に来るといふ、逆転の現象が起きていると言えるだろう。そのような環境に最初から触れ合っている子どもは、いつまで経ってもその状況の異常さに気がつかないかもしれない。

ピアジェは子どもの発達段階を感覚運動期、前操作期、具体的操作期、形式的操作期の4段階に分けたが、子どもは感覚運動期において感覚を通して世界と触れ合い、その触れ合った世界を意味づけ、シンボル化していく。

岡本（1982, p.119）は子どもが外界の事物をシンボル化（言葉に）していく段階で、そのシンボルや言葉には情動性、行動性、認識性の3つの性質があると述べている。子どもが事物を認識する時、その認識は、対象の情動性や行動性を抜きに成り立たないということも述べている。

以上のことから、身ぶりなき言葉とは、情動性、行動性という土台を取り去り、認識性だけが取り残された不安定な言葉であると言えるだろう。

5. 〈言葉〉に着目した保育士養成校の役割

例えば幼稚園教育要領の領域〈言葉〉において「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」という目標が掲げられている。この目標の狙いとして書かれた3つ目に「日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」とある。

「言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」ためには「言葉に対する感覚を豊かに」する必要があり、言葉に対する感覚を豊かにするためには、前提として身体感覚を豊かにする必要がある。身体を通して豊かな感性を育み、その過程で言葉を学び育むことが大切である。身体なしには言葉を育むことはできないといっても良いかもしれない。したがって、保育者は子どもが身体を通して何を感受し、その感受したものと子どもから紡がれた言葉の関係性を感じ取り、言葉を育むための援助を行

わなければならない。自らの心も含め、子どもや保護者の心と向き合い支援するためには、保育者自身の感性の豊かさ、柔軟さ、そして視点の鋭さが必要不可欠である。したがって保育士養成校においては、上述の感性や技術（視点）の大切さを意識し、身体感覚に根ざした言葉を紡ぐ機会を設けることで、学生自身の感性や言葉の豊かさを育むことが大切である。

【参考・引用文献】

麻生武『身ぶりから言葉へ 赤ちゃんにみる私たちの起源』（2002）新曜社

岡本夏木『子どもとことば』（1982）岩波書店

小椋たみ子「前言語から初言語期のコミュニケーション発達① 前言語コミュニケーションの発達」

『よくわかる言語発達 改訂新版』（2017）ミネルヴァ書房

総務省『情報通信白書 令和4年度版 ICT白書 情報通信白書刊行から50年 ICTとデジタル経済の変遷』（2022）日経出版社

マイケル・コーバリス 著 大久保街亜 訳『言葉は身振りから進化した』（2008）勁草書房

文部科学省『幼稚園教育要領』（2017）